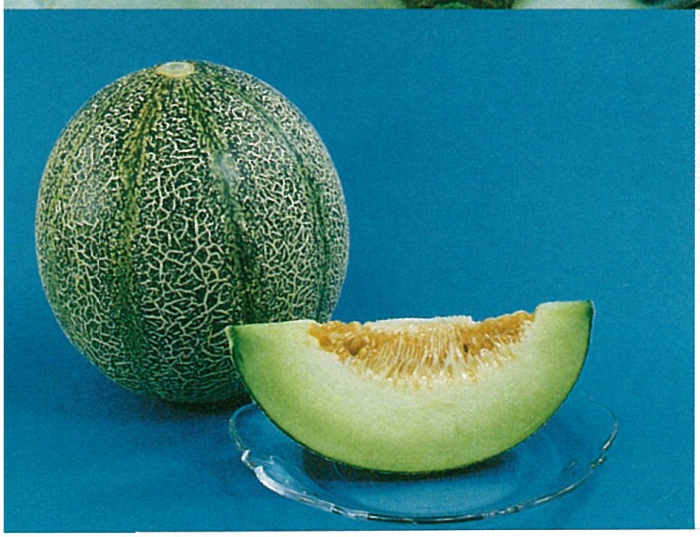
つる割病・うどんこ病抵抗性、安定した食味・輸送性の高い緑肉種

春作立栽培、這栽培・秋作立栽培用

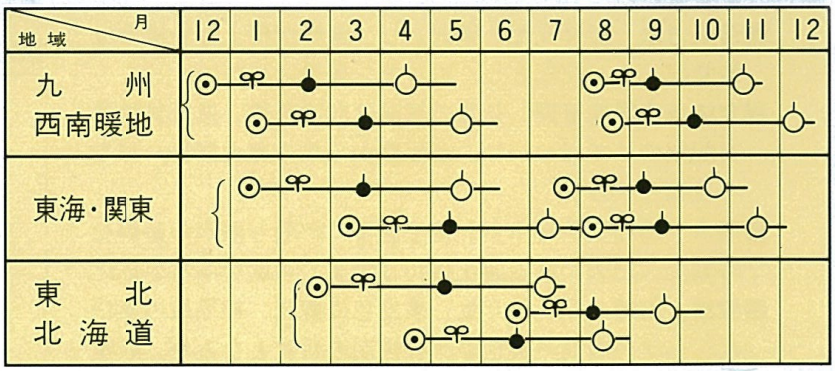
注 つる割病菌レース0，2に抵抗性
（レース1，1·2yには罹病性）

ホームメロン ＦＲアムス

特性と栽培方法



第1図 標準作型



⊙は種　♈定植　●交配　○収穫

公益財団法人　園芸植物育種研究所

〒270-2221　千葉県松戸市紙敷 2-5-1　TEL.047-387-3827　FAX.047-386-1455

ホームメロン FRアムス 〈特性と栽培方法〉

育成経過

1974年に発表したアムスは、外観が従来のイメージと異ることから普及するまでに時間を要したが、食味の良さと安定した生産力が認識され、全国で広く栽培されるようになった。しかしつる割病（フザリウム）に対する抵抗性を持っていなかったため、アムスと外観、食味、栽培特性を変えることなく、つる割病の抵抗性のみを付与する方向で育種を進め、1993年にこの目標に到達したので命名発表した。つる割病の抵抗性は園研メロン台木２号の持つ抵抗性因子をアムスの雌親に付与することで得た。

品種特性

○果形はやや腰高、果重は1.2～1.5kg、果皮は緑色で縦縞があり縞以外の部分にはネットが出る。
○果肉は厚く緑色で、胎座部は淡橙黄色となる。
○肉質は収穫後徐々に軟質多汁となり、３日目頃から適食期となる。発酵性はないため適食期は数日間持続する。
○標準糖度　15～16度
○成熟期間
- 九州（４月出荷）　60日前後
- 関東（６月出荷）　55日前後
- 東北・北海道　50日前後

○雌花の着生は安定し、低温着果力も強いので蜜蜂交配で安定した着果が得られる。
○へたの離層の発現時が収穫適期で、熟度の揃ったメロンを出荷できる。
○つる割病とうどんこ病に抵抗性。
○春作と秋作に適応し、各作型で安定した食味のメロンが生産できる。

栽培の要点

■作型と栽培様式　春作はハウス、大型トンネル（被覆資材270cm以上）、秋作はハウスでの栽培を原則とする。春作は這栽培または立栽培、秋作は立栽培とする。（作型は第１図参照）

春作…這栽培　子づる２本仕立、株４果穫り。
　　立栽培　親づる1本仕立、株1果または2果穫り、子づる2本仕立、1つる1果（株2果）穫り。
秋作…立栽培　親づる1本仕立、株1果、または子づる2本仕立、1つる1果（株2果）穫り。

アムスの栽培経験のある場合はそれに準じる。

■標準施肥量（成分量kg／10a）
- N ……12～15kg
- P ……20～25kg
- K ……15～18kg
- Ca ……70～100kg
- 完熟堆肥 ……2t

■誘引方法と株間　第２、３、４図参照。

■定植時の温度条件　高畦マルチ栽培とし定植時の地温は地下20cmで18℃以上、最低気温10℃以上を維持することが必要。

■着果方法　蜜蜂交配を原則とし、蜜蜂が使えない場合は筆交配、人工交配とし、ホルモン着果はしない。

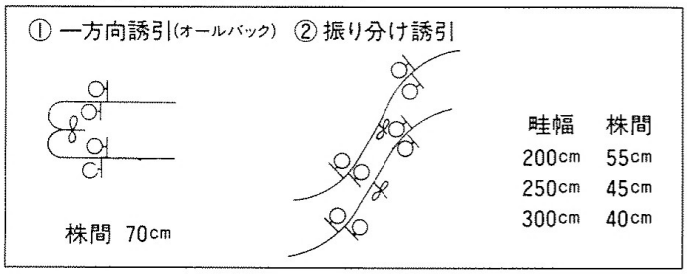
■定植後の温度管理　昼間の気温は30℃前後、最低気温は交配期前まで12～14℃、交配期から果の肥大期15～17℃を目標とする。

■灌水　鶏卵大からネット発生前までが最も灌水の必要な時期で、肥大の終る開花後40日頃まで適度な灌水が必要。

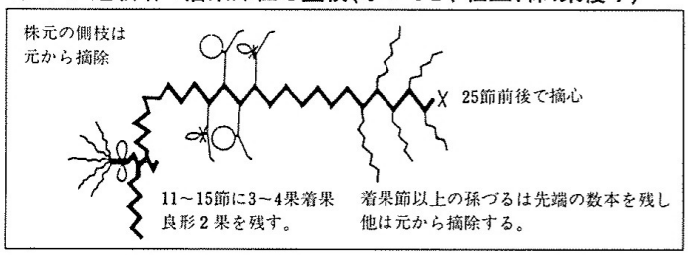
■収穫、出荷　開花後日数、果皮色の変化、結果枝の葉枯れ、ヘタの周囲の黄化等が収穫期の目安となるが、収穫適期はヘタの周囲に離層が発現した時である。離層発現から５日間くらいは落果しない。

■果実の管理　花弁の乾きが遅れると花落部の病気が多くなるので注意する。

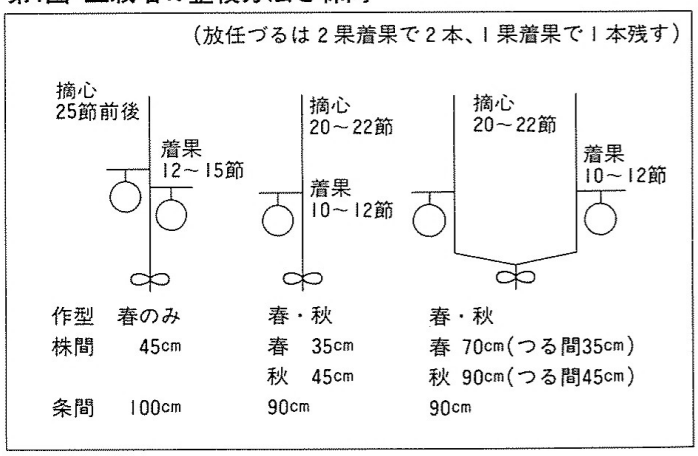
第2図　這栽培の誘引方法と株間



第3図　這栽培の着果節位と整枝（子づる2本仕立、株4果穫り）



●株元の数葉は交配期前に摘除し通風、日当りを良くする。
●生育後半に伸びてくる枝で、特に強いものは先を止める程度とし、元から摘除するような強整枝はしない。
●自然着果した果はその都度摘果する。

第4図　立栽培の整枝方法と株間

（放任づるは２果着果で２本、１果着果で１本残す）